崖

杉浦日向子

ウワザシノヤ
イムケノソデ
シリザヤ
マエタテ
キクガサネ
ヒシノイタ
イシツキ
タチ
ハチマンザ
シコロ
ヒシトヂノイタ
ホシ
フクリン
セメガネ
ハチツケノイタ
コジリ
スソカナモノ
ツノモト
ヲビトリ
ワランジ
ソデ
マビサシ
センダンノイタ
ムナイタ
スネアテ
キュウビノイタ
クサズリ
ハ
ツルハシリ
ヨロイヒタタレ
ツバ
フキカエシ
メヌキ
ヨコテ
メヌキ
ツカガシラ
シノギ
キッサキ
カケヲ
シメヲ
ツラヌキ
ムネ
コシガタナ
コテ
カブトガネ
シノビヲ

斯時首ノ奏者凛乎トシテ披露スル也

諸角三左衛門の討ちとりましたる淡路隼人正信久の首ッ。

む
摩利支天

ギロリ

ふむっ

ありしむかしのことにおじゃる。

小さき戦を終えた
大将が
すっく
グワシャ
グワシャ
摩利支天

とん

ぐら
ぐらしゃ

お寺で「首実検」を
しておじゃると
きらッ
摩利支天

――その首どもの中に
むむむむっ

化粧首かッ

ざわ

ざわ

ざわ

は

紅白粉に黒々と鉄漿をつけておりまする

名の知れぬ首で味方はもとより生捕の敵兵に尋ねても見知る者が居らなかったそうな。

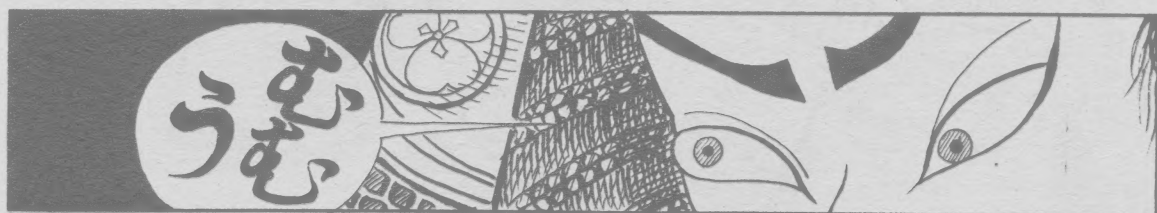
討ったのは
その方か
は

フム
その時の
模様を
逐一話してみよ

は

手前は二番隊
熊谷玄蕃様
配下で
大鳥山東にて
敵軍と
かち合い
ました。

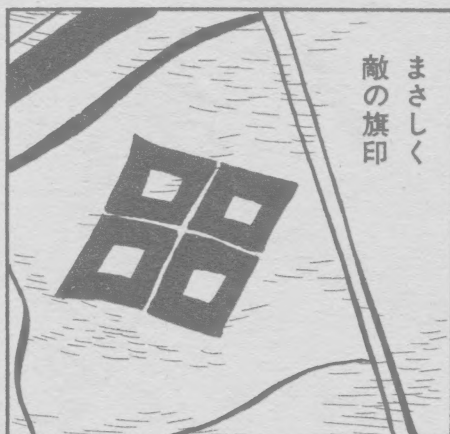
くだんの
乱戦の最中
手前は
不覚をとり
昏倒した様子で
気付いた時には
あたりは
しずまり返って
おりました
?!

痛―ッ

四方霧の海で
樹木一本見えぬ有様
でしたが
何にもせ
陣中に辿り着かねばと
必死に歩きました
……

背後より
馬の馳せ来る物音に
振り返れば
カカカッ
カカカッ
カカッ
ん

はっ

南無八幡

とっさに
槍を
操り出すと
馬の胸へ
すぶ

ヒヒーン
馬は忽ち
狂って
騎馬武者を
ふるい落とし

稲妻走りに
飛んでゆく
——と
みるや

グヮラ
ガラガラララララ!!
五、六間行かぬ内
すさまじき音をたてて
まっさかさま

……
……

実に
霧の先は
崖でありました
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ
ガラ

――落馬した武士は
死んだ様になって
動きません
神明八幡大菩薩

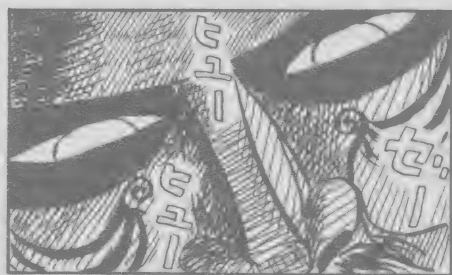
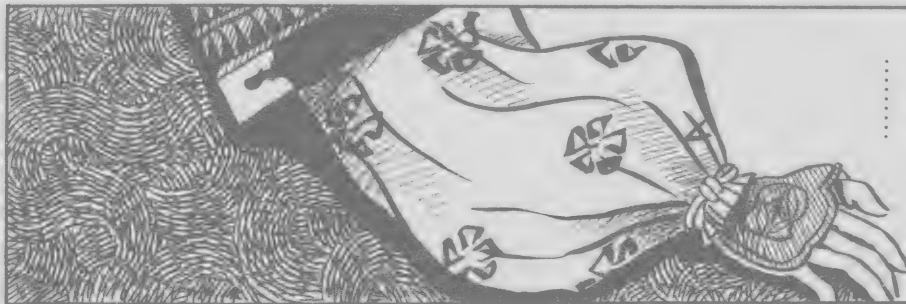
眉庇をつかんで
あおむけにすると
既に
深手を
負っており
虫の息で
あります

ゼイ
ゼイ

ヒュー
ヒュー
ゼー

御首級
頂戴
仕るッ!!
ガシャ
…………
待て。

!!

?!

…………この腕(かいな)……………動きさえすれば

貴様如きにむざと討たれはせぬものを………

うっ…この期に及んで未練がましいぞッ!
覚悟召されい!!

……待てというに………首は呉れてやる
……但し頼みがある……心あらば聞き届けよ……
ぜイ…ヒュウ
ゼイ……ヒューウ

……頼みというのは
首を討った後
胴体を
崖下へ落としてくれ
というもので
ありました

如何なる崖であるか
霧で然とは見えぬものの
馬の落ちるさまからして
相当の深さと思われます

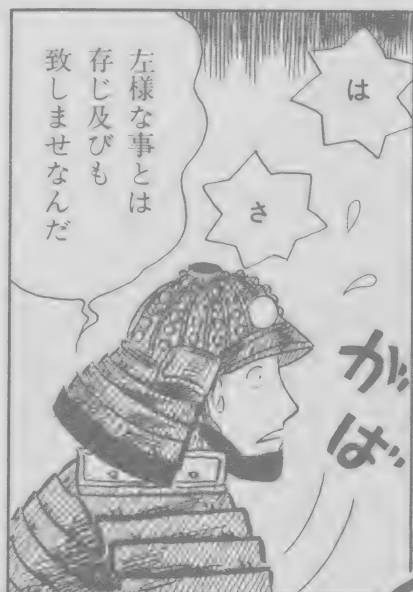
落ちれば
必ずや
身も骨も
砕け散りましょう

察しまするに
昨今死人より
具足を剥奪
せしむる仕業が
ございます故
死期を
悟りて
自ら崖下へ
向い、馬を
走らせたもので
ありましょう

ふむ
さもあれど
騎馬武者程の
者の名が
知れぬとは
如何様
奇怪なことよ

ご案じ
召されますな
ガシャ
恐らくは
藩主秘蔵の近習
か、敵将の子息
あたりで
ございましょう。

生捕の敵兵は
いずれも
葉武者、
雑兵どもで
あれば
見知りがないのも
是非なきこと。
じき素上も明らかと
なりましょう。

ふむっ

じめしゃ
その方まさか女武者を討ったのではあるまいな！
さっ
は
さ
左様な事とは存じ及びも致しませなんだ
がばッ
むう
ぱち
がしゃ
されば手立がござります
生きている者から首を掻き切った場合まぶたを押し開け
黒目が正しく中央にあれば男、さにあらずば女の首と口伝にござりまする
ジロ
…………。
よし確めてみよ

ゴクッ

自身で
確めよう
これへ
持て

いや
待て

…………。
ぎゅ
ぎゅ
男と見ゆる。
すっ
ほーっ
ホッ
よしッ両人共下れッ
ははッ

うーむ
それにつけても……
……惜しいことよ……

まさに稀代の珍宝と申すべき首ですな…
ガミャ

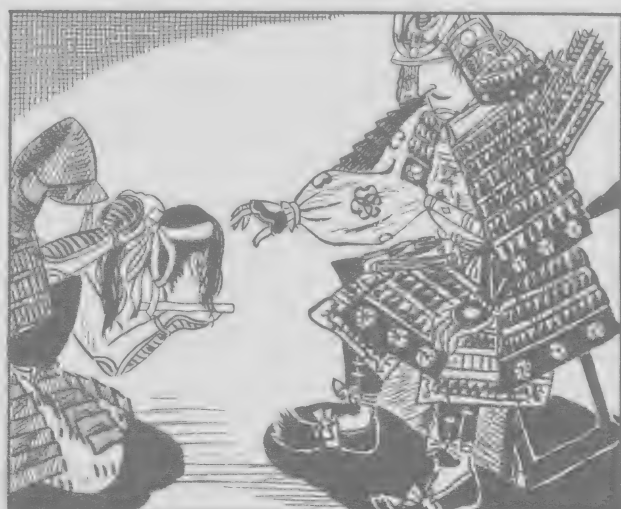
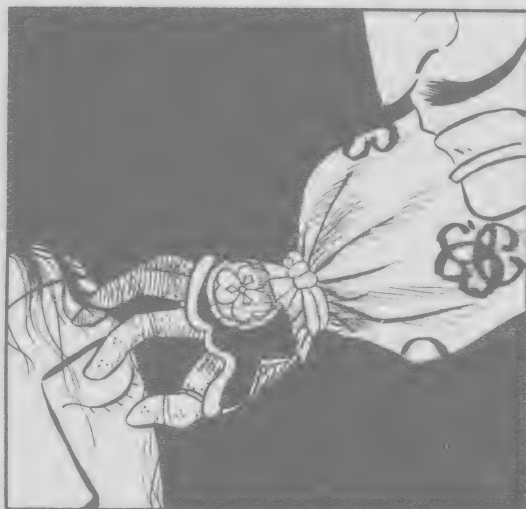
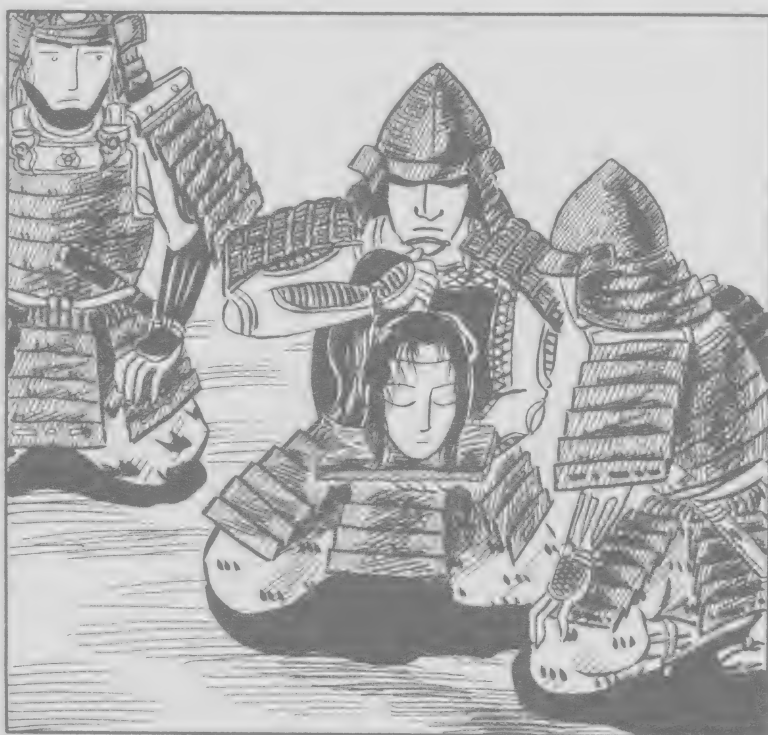
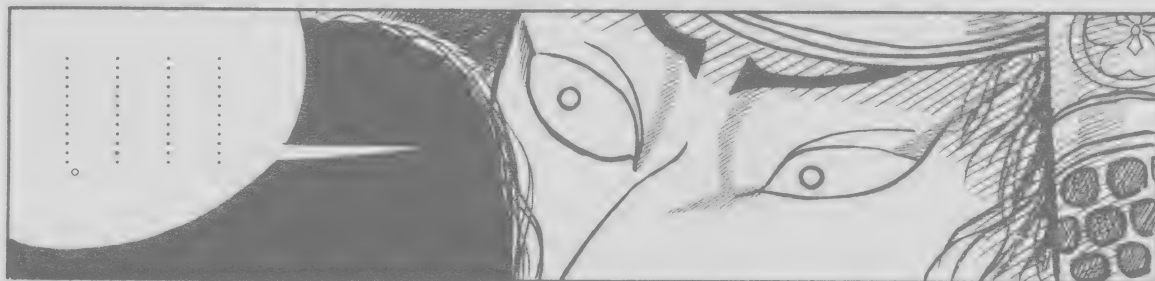
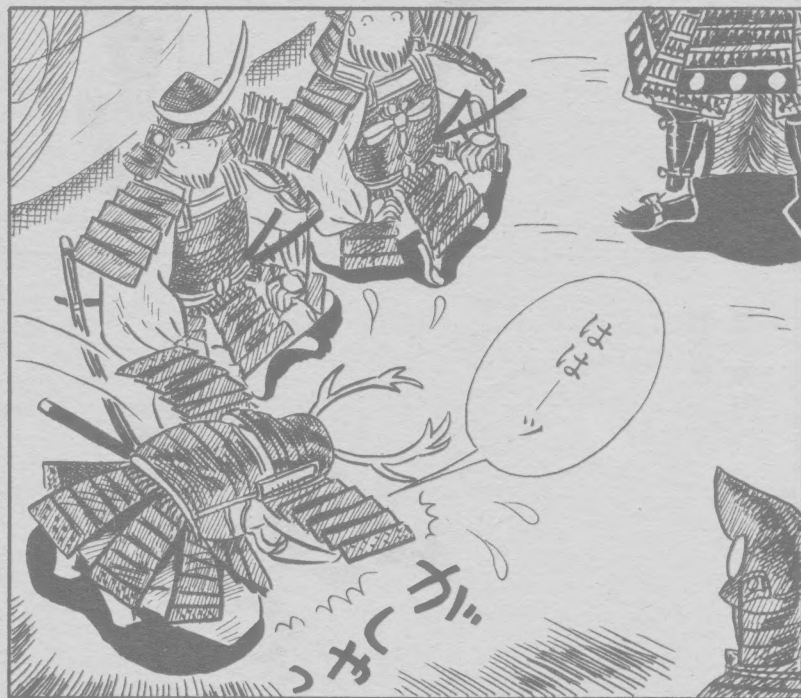
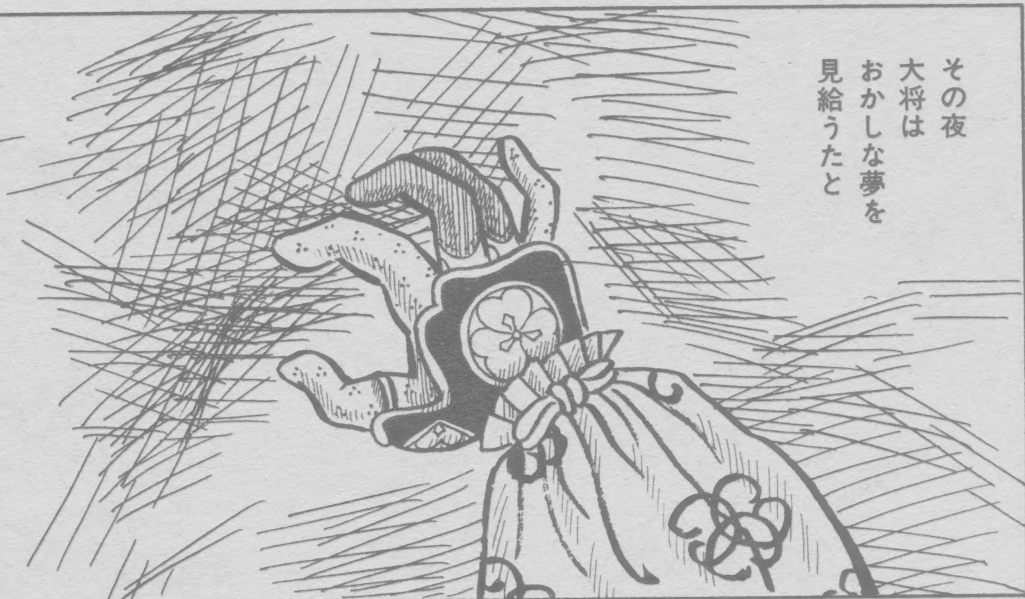
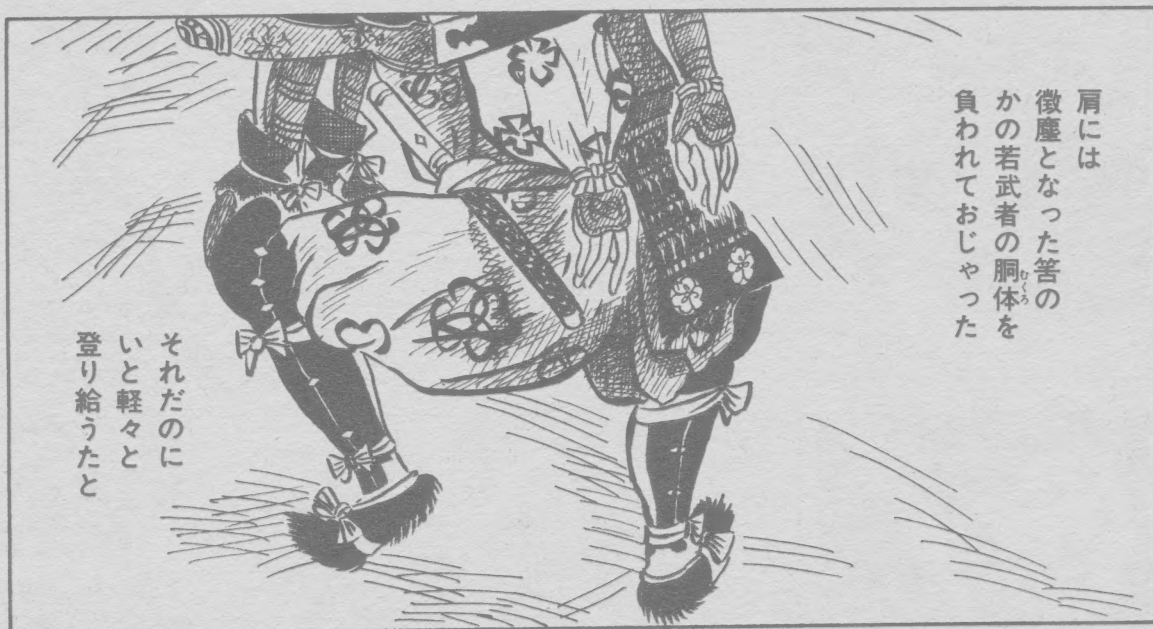
ひとつ今宵は只今の首を肴に酒宴というものも又、一興かと……

むかっ

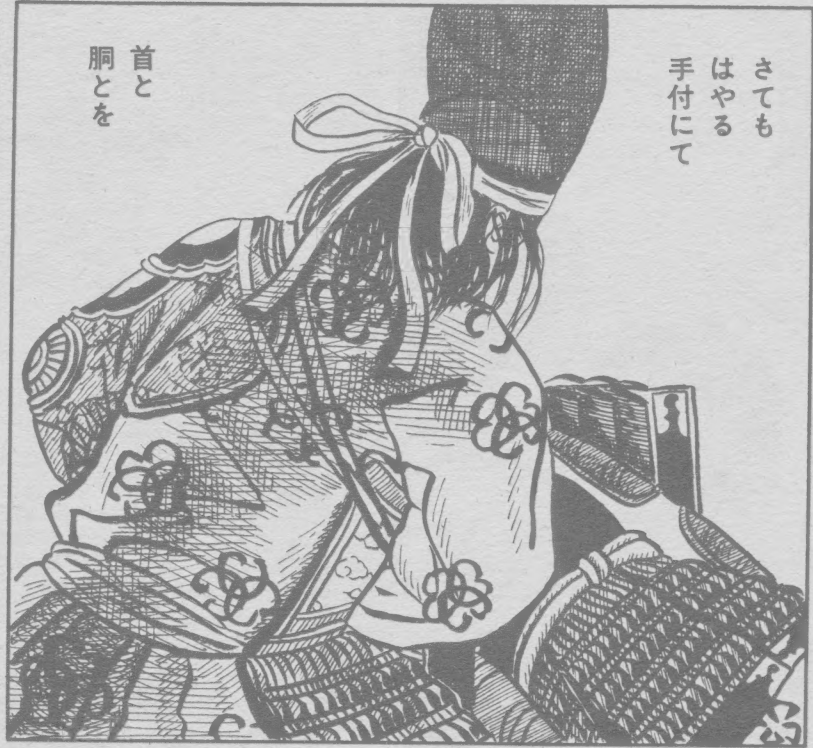
ぐわしゃッ
たわけッ!!

その方は死者の首を玩ぶつもりかッ!!

僅かなりとも吾身いとおしくば以後口を慎しみおろうぞッ!!

!!

その夜
大将は
おかしな夢を
見給うたと
底知れぬ崖を上へ上へと
這い上っておじゃる

肩には
徴塵となった筈の
かの若武者の胴体を
負われておじゃった
それだのに
いと軽々と
登り給うたと

登り登ってついに
上へ出ると
はっ
はっ
はっ
はっ
飛ぶ勢いで
舞い戻り

さても
はやる
手付にて
首と
胴とを

縫い合せん
とし給うた

されど
どうにも
継ぐ事が
ならず
大汗かきて
弱りきって
居なさると
――目覚め給うたと

その夢が
七日七晩
続いたので
国許へお帰りに
なられてから
お生まれあそばした
最初の姫君に「縫」、
次の若君に「継丸」と
お名付けなされた
ことでおじゃった

そうして
その若君が今の殿様……

お父君におじゃりまする。

うっふふふ
くくく

サレバこれにて語り仕舞すみすまし
ぐい

オヤスミアソバセ
おわり。